

(4) 活力ある地域づくりに向けた取組の支援

飼料用稲の生産・利用で進む知多地域の耕畜連携

稲発酵粗飼料(稲WCS)の普及・定着に向けて

知多農林水産事務所 農業改良普及課



現地検討会(平成21年試作時)

本当に稲WCSが定着できるのか!(不安感?)

畜産及び水田作の背景と実情

- 知多地域の畜産 → 大消費地や主要港湾に近接する立地条件が強み
農業産出額187億円(知多地域全体の47%)
特に酪農・肉牛の産出額は94億円(県内シェア35.6%)、28億円(29.7%)
近年の飼料価格の高騰により、輸入飼料から国産飼料への関心が高まる
- 知多地域の水田作経営
丘陵地が多く効率的な土地利用が進みにくいこと、排水不良田が多い
小麦・大豆等の生産が不安定であることなどの課題

普及活動の背景

◆稲WCSの生産と利用に向けた耕畜連携システム構築への取組
平成21年に稲WCSの試作

専用収穫機の試用、栽培指導、WCSの品質評価等の支援

うまくいった → 水田作・畜産農家に、本格的に取り組む機運高まる!

さらに、連携方法の検討、栽培者の組織化と収穫専用機の導入支援が普及課に求められた(先進事例調査、コスト試算等)

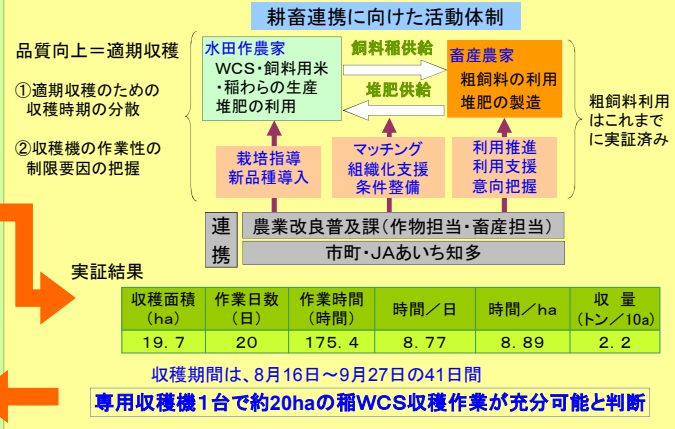
◆水田作農家(栽培)6戸と東浦WCS生産組合(収穫作業)の連携による20ha規模の実証(平成22年)

対象品種	収穫時期	栽培者	作付面積
ひとめぼれ	8月上旬	1戸	1.4 ha
コシヒカリ	8月中旬	3戸	8.9 ha
ホシアオバ	8月下旬	2戸	1.7 ha
あさひの夢	9月中旬	3戸	4.5 ha
あいちのかおり	9月下旬	2戸	1.5 ha
タチアオバ	9月下旬	1戸	1.8 ha

6品種を組み合わせた収穫計画を設定して、専用収穫機1台での作業時間、作業面積及び収量を調査

普及活動(調査研究)の内容

◆背景を踏まえ、専用収穫機1台で20ha収穫可能なWCS用稲の作付体系の実証



稲WCS収穫作業調査(実証)の実施



調査内容:作業日数、作業時間、収量等

水田作農家と畜産農家との検討会



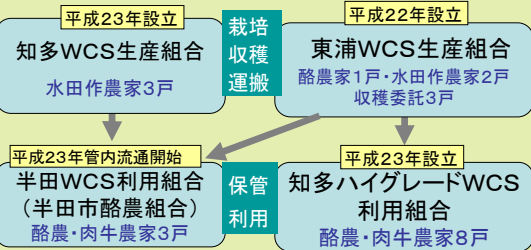
- ・調査研究の成果報告
- ・コスト負担に関する検討
- ・耕と畜の役割分担に関する検討
- ・堆肥利用の連携に関する話し合い

実証により、農家が「やれる!」と感じた

普及活動の成果

生産・利用組織の誕生

参加者が増え、組織化が進んだ



農家同士で連携していく体制ができた

稲WCS栽培面積及び供給量の推移



獣害対策？ やっぱ獲らなきゃだめでしょ！

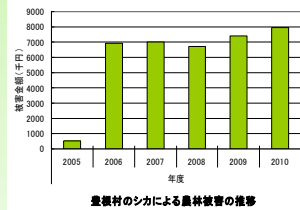
～特区を活用した獣害対策地域モデルづくり@愛知県豊根村～

新城設楽農林水産事務所農業改良普及課

山間の集落… シカ、イノシシ、サル
など野生獣の被害が深刻

※豊根村では特にシカの生息密度が高い

→被害額4.7億円 耕作意欲が喪失、集落は荒廃…
高齢化する地域にとどめを刺しかねない大問題！



- ・ 柵などによる防御だけでは不十分
- ・ 猟師に駆除してもらうのも限界

※猟師が高齢化、猟銃使用の制約



山中で100頭駆除しても、ホントに効果があるのかな……??
畑のそばで1頭のシカを退治できれば、効果が実感できる！！

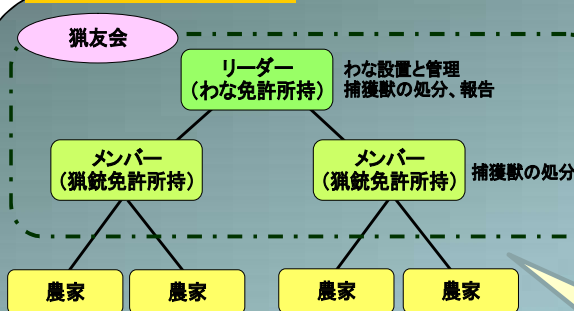
畑を荒らす個体は、畑で確実に駆除しよう！！

☆そこで、農業改良普及課では…

- ①農家が捕獲に参加できるよう豊根村役場と協力 わな特区導入を支援
→2009年7月 「とよね有害鳥獣被害防止特区」認定
- ②捕獲グループによる、くくりわなを使ったシカ捕獲の実証
- ③猟師をリーダーとする、集落ぐるみ捕獲体制づくりを支援

普及指導員が「わな免許」を取得し講師役

☆取組の成果



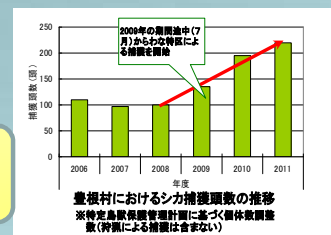
くくりわなの使い方講習



くくりわなで捕獲されたシカ

「豊根村独自の捕獲ができた！」
→ 捕獲頭数が驚異的に増加

猟師さんと農家のコラボによるシカ害対策モデル



○わな特区事業による集落ぐるみ捕獲の仕組み

わなの見回り、捕獲された際の連絡(捕獲に参加)
※安全講習受講が義務づけられている。

あきらめムードを一掃、自信みなぎる「獣害に強い豊根村」へ！

☆今後に向けて

- ・ 2012年から特区が全国展開へ
→ とよね方式によるグループ捕獲の普及拡大に期待(園芸部会組織でのハクビシン駆除など)
- ・ 捕獲したシカの有効活用(処理施設や商品開発が必要)

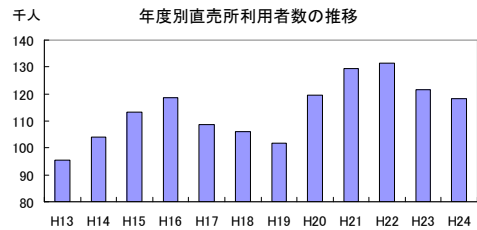


【愛知県】

人が集まる「アグリステーションなぐら」を目指して

新城設楽農林水産事務所農業改良普及課

設楽町名倉（標高650m）の道の駅「アグリステーションなぐら」（以下アグリ）の農産物直売所は、年間10万人以上が訪れる、農山村と都市、生産者と消費者の交流拠点である。しかし、この数年、**直売所利用者が減少**している。



そこで普及課では、直売所出荷者の組織である名倉高原生産組合（組合員数97名、平成10年設立）を対象として、**知名度の向上、来たくなるイベントの開催、直売所農産物の出荷を推進**する活動を支援した。

（組合員）
もっとたくさんの人に
来て欲しいなあ



（普及指導員）
「知って、寄って、買ってもらう」
ための戦略を立てましょう

知って（知名度の向上）



都市住民との交流の強化
☆貸し農園事業
（利用者との交流会）
☆広域農道沿いの植樹で交流

寄って（イベントの支援）



アグリ最大のイベント「感謝祭」の
充実
☆新聞折込、町内放送によるPR
☆名倉高原米、ルネッサンスと
ジュースのPR販売

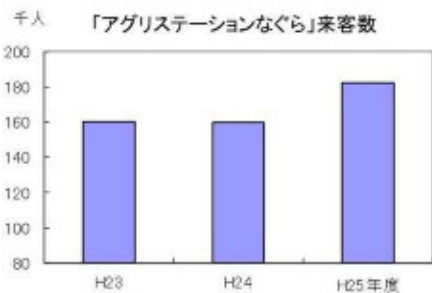
買って（出荷の推進）



☆ここでしか買えない特産物の
栽培指導（やまごぼう、天狗な
す、スイートコーンなど）
☆野菜栽培研修会
☆品評会

【成果】

- ・交流活動(H22～25)では、愛知県内21市町から278名の消費者が参加して、道の駅「アグリステーションなぐら」を新たに知ってもらえた。
- ・組合役員にアグリを地元を知ってもらおうという意識が芽生えた。
- ・「アグリステーションなぐら」の来客者（直売所+食堂）が前年度より14%増加した。



【成果の上った要因】

農業改良普及課は、名倉高原生産組合の設立前（平成9年度）から直売野菜の研修会を開催するなど支援しており、道の駅の運営に参画しやすい環境にあった。

直売所の運営方針や年間計画を決定する役員会に出席している他、週一回程度の直売所・事務所訪問しており、**信頼関係の構築「言いやすい関係づくり」**が構築されていた。

【愛知県】

豊橋市における耕畜連携の取り組み

～耕畜農家の連帯感を育成～

東三河農林水産事務所農業改良普及課

背景

水田作農家

集団転作の未実施により
麦大豆の導入困難

酪農家

・粗飼料価格の高騰
・堆肥の不需要期の存在

→ 他の転作作物は…？

→ 輸入粗飼料に代わる飼料は…？
堆肥を散布できる農地は…？

両者の要望を **稲WCS** 生産利用による **耕畜連携** の取り組みで解決！

目標

1 需給調整を容易にする
組織設立

2 **利用量拡大**

3 **堆肥利用と散布**

活動

組織設立

①稲WCSの試験的生産・利用

- ・試験ほ場の設置
- ・試用希望者の募集
- ・調査研究の実施



②組織発足メンバーの確保

③関係機関との連携

④耕畜間の連携調整

- ・耕畜農家の顔合わせ
- ・組織立ち上げ支援



利用量拡大

①新規利用者の確保

②長期利用に向けた調査・指導

- ・製品情報の記載
- ・ラップフィルムの8重巻

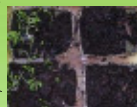


腐敗・カビ発生
ロール減少

堆肥利用と散布

①堆肥の品質確保

- ・雑草種子の発芽試験



②作業体系の整備

③畜産農家間の連携強化

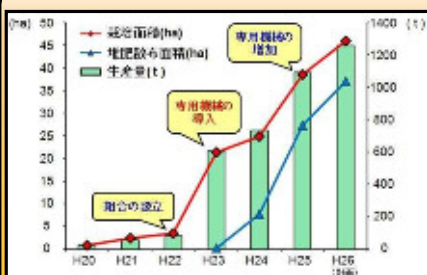
(作業の分担)

- 現場に即した作業体系の確立



散布面積拡大

成果



①組合の設立 (H23年)

②栽培面積の拡大

(H23年: 21.3ha → H26年: 45.8ha)

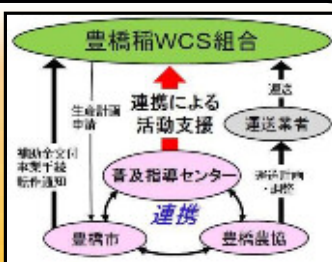
③水田での堆肥利用の広がり

(H25年: 27ha (栽培面積の約70%))

④関係団体の連携による支援体制

組合員全員で稲の生育状況、
ロール発酵品質を視察・確認

⑤仲間としての連帯感の獲得



今後の課題は…

①栽培面積、利用量拡大

②需給調整の効率化

③堆肥散布面積の拡大

地域資源を活用した耕畜連携モデルの確立 ～WCS用稲栽培と堆肥の利用促進～

西三河農林水産事務所農業改良普及課

1 対象

安城市：JA あいち中央営農部会員、
農用地利用改善組合
西尾市：酪農家

2 背景

- ・ 洪積土壌で地力が低い安城市の水田
- ・ 帰化アサガオ類による大豆収量低下



図 水田の利用形態（2年3作）

- ・ 輸入飼料の高騰が畜産経営を圧迫
 - ・ 西尾市には堆肥供給余力の見込み
- ↓
- ・ 安城市の水田作農家と西尾市の酪農家による稲WCSの試行的取組

3 目標及び活動内容

安城市、西尾市の広域耕畜連携により、

- 1 WCS用稲栽培の定着
- 2 水田への堆肥散布面積の拡大

■WCS用稲栽培

農用地利用改善組合への働きかけと
地区内の合意形成支援
水田作、畜産農家の連携支援

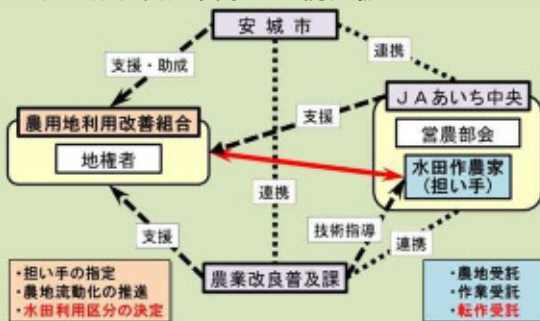


図 安城市の水田営農推進体制

■水田への堆肥散布

堆肥利用推進組織の検討

4 成果

■WCS用稲栽培

地区の農用地利用改善組合合意のもと集団転作の一環として、麦あと大豆から一部WCS用稲に転換。

取組が1戸、2.5ha（22年度）から5戸、12ha（25年度）に拡大。

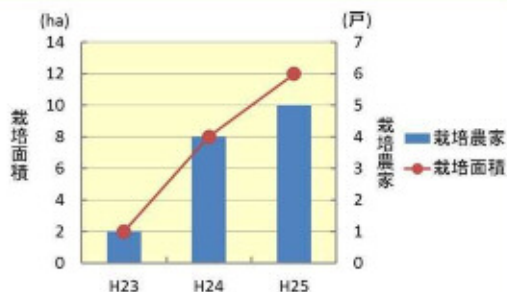


図 WCS用稲栽培農家数及び面積の推移

■水田への堆肥散布

西尾市を含めた「水田への堆肥利用推進会議」を設立。

新規の水田への堆肥散布面積が42ha（25年度）に拡大。

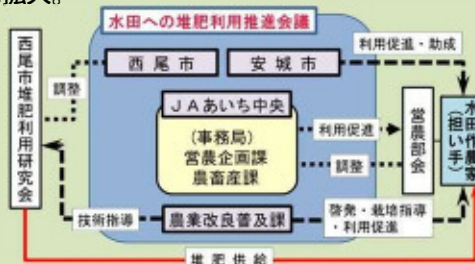


図 水田への堆肥利用推進会議の構成

5 今後の課題

- ・ 既存地区でのWCS用稲栽培面積の拡大
- ・ 新たな地区、農家による取組の推進



酒米新品種「夢吟香」を用いた吟醸酒の商品化

～新城市の交流型農業の確立に向けて～

新城設楽農林水産事務所 農業改良普及課

課題の背景

- ・新城市は都市と山間の接続部に位置
自然が豊かで都市に近いことが強み
- ・高齢化と営農意欲の減退で農業生産額は減少
- ・地域活性化のため、**特色ある特産品の開発と
交流型農業の推進**が必要

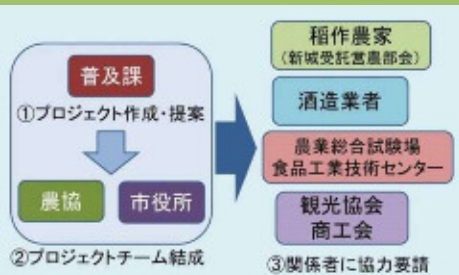
目標

愛知の酒米新品種「夢吟香」で
地酒の吟醸酒をつくろう



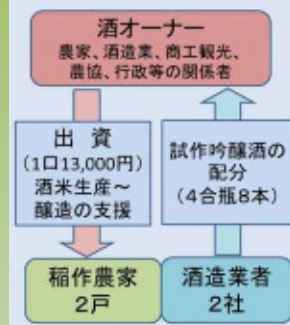
主な普及指導活動

プロジェクトの提案 22年度



吟醸酒の試作 23～24年

- ・オーナー制による資金調達と情報発信
- ・関係者の役割の明確化と連絡調整
- ・高品質酒米の栽培指導
- ・商品化に向けたPR活動



酒米の契約生産 25～26年

- ・夢吟香研究会(農家2戸)を立上げ
高品質・安定的な生産体制を確立
- ・酒造り体験イベントを実施



普及指導活動の成果

- ・夢吟香を用いた吟醸酒の商品化 (2銘柄)
- ・農商工関係者の連携、消費者交流の実現による
地域農業の活性化
- ・稲作農家の収益向上(主食用米より80%増益)



※成果が上がった要因

- ・地域の人を巻き込む工夫
- ・商品化までを見据えた計画



【愛知県】